



児童劇映画◎31分・カラー

うれしい ときにも 涙がでる

文部省選定

◎企画—貯蓄増強中央委員会

◎製作—株式会社桜映画社

◎価格—16ミリ/210,000円
VTR/55,000円

◎—父と子のふれあいを

全国視聴覚教育連盟事務局長

関口 勇

「お父さん」の作文を書くことから話は展開して、家庭におけるやさしい母親の心づかい、苦しくとも懸命に働く父の姿が、息子テツヤに深い感動を与えている。しかも担任の先生の温かい心情は、ともすると沈みがちになるテツヤの心に活力を与え、素直でしっかりした心構えを育む大きな力になっている。

仮りに子どもが父親と日々顔を合せることができない状況にあっても、目に見えぬ父の仕事における苦労・苦心・努力の大変さを、テツヤの目を通して多くの子どもたちに伝えることであろう。

人間悲しい時に涙を流す。しかしうれしい時にも「うれしい涙」を流す。互いの心の琴線にふれて共鳴するのである。この心境は千万言をもってしてもいいつくことはできない。心と心の尊いひびき合いである。

親にとっては、親と子のすばらしい心のかよい合い—家庭関係—を端的に示されたものとして受取れよう。家庭における母親の位置、父親像のすばらしさ、そしてそれが感受性豊かな少年に与える深い感動、この家庭環境が少年テツヤの人間形成に及ぼす力はいかばかりと思われる。

こうして育ちゆくテツヤの将来にこそ、無限の期待をもって見守りたい気持ちでいっぱいである。



◎—心にのこる作品

映像教材利用研究会会長 瀬田隆三郎

最近の世の中の動きは、早いテンポで大きく変化をしています。そんな中であって「親子の心のつながり」や「家庭のあり方」そして「教師と子どもの交流」などが大きな話題になって、たえず取上げられています。

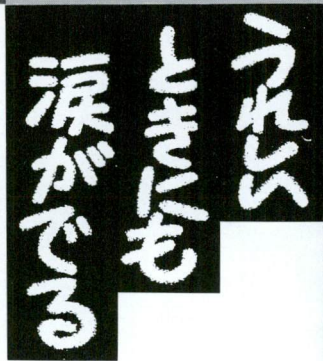
この児童劇映画『うれしいときにも涙がでる』は、親子の生き方や心のつながり、あるいは教師と子どものかかわり方などを、わかりやすく感動的にまとめあげて、時の課題に取組んだ佳い作品です。

美しい長良川の流れる岐阜市を背景にドラマは展開しています。親子ともどもに視聴すると、それぞれの立場で、考えたり、感動をうけたりすることがある作品であることはまちがいないことと思います。

心にのこる作品です。



児童劇映画◎31分・カラー



◎—あらすじ

作文の得意なテツヤは、「お父さん」という題で10枚以上という先生の宿題に大張り切りだ。早速、両親に取材を開始する。しかし、提出期日がきてもテツヤは1枚も書けなかった。

それは、取材していくと刃物工場で技術者として働いている父が、このところの円高不況で、工場が倒産して、失業するかもしれないことを知ったためだった。

そんな時、テツヤは塾の帰りに父が刃物の行商をしている姿を目撃して、ショックを受ける。また、そのことを学校でガキ大将のガバチョに冷やかされ、普段はおとなしいテツヤも怒りを爆発させて、大ゲンカをしてしまう。好きな作文を書かないテツヤを心配した先生は、ある日父の工場を訪ねる。テツヤは、先生の話から、父は失業して訪問販売をしているのではなく、会社ぐるみで円高と戦い、技術者も販売の一線に立って、会社の再建に努力していることを知る。そして、改めて父の少年時代のことから取材を始める。

そんな日々が続くある日、母は家族を元気づけるために、ピクニックを計画する。岐阜城の高い天守閣に立つテツヤと父——。眼下に広がる街並を見ながら、そこで一生懸命に働く父を思い、「ガンバレ、お父さん」と心に湧き上がる思いに、おもわず涙ぐむテツヤだった。



◎対象…小学生・中学生・青年・成人・父母

◎用途…特別活動（学校映画会・道徳・ホームルーム）
子供映画会・親子映画会・地域社会活動

◎キャスト

テツヤ…………川名 誠 母・多美子……二木てるみ
父・健太郎……高橋長英 石上先生……安藤 一夫
岐阜大学教育学部附属小学校5年2組・他

◎原作

岸 武雄『うれいときにも涙がでる』（小峰書店刊）

◎製作スタッフ

製作＝村山英治	音楽＝針生正男	助監督＝神山魁三
脚本＝神山魁三	録音＝井上秀司	中島裕
神山征二郎	編集＝沼崎梅子	撮影助手＝山屋恵司
監督＝神山征二郎	吉田栄子	木村光男
撮影＝山本 駿	記録＝福島勇子	照明助手＝高木広志
照明＝山本嘉治	進行＝下村芳樹	